
賢者諸君へ

貧乏書生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賢者諸君へ

【Nコード】

N7833P

【作者名】

貧乏書生

【あらすじ】

主人公である、ジオン軍士官の「私」から、「賢者諸君」への手紙という形式の小説です。開戦前から一年戦争終結まで取り扱うつもりです。一年戦争に関しては、初代以外はよく知らないので多少の設定はご容赦願います。原作キャラはあまり登場しません。更新も遅く、文章でも未熟な点は多いですがよろしければ読んでください。

其の壱（前書き）

主人公である、ジオン軍士官の「私」から、「賢者諸君」への手紙という形式の小説です。開戦前から一年戦争終結まで取り扱うつもりです。一年戦争に関しては、初代以外はよく知らないので多少の設定はご容赦願います。原作キャラはあまり登場しません。更新も遅く、文章でも未熟な点が多いですがよろしければ読んでください。

其の壱

前略

親愛なる賢者諸君、私は諸君らに申し訳の立たない事をした。本当に済まない。詫びて許してもらえとは思っていない。しかし、詫びなければ私の心は愈々張り裂けそうだ。

諸君等はきっと、私が何故こんなことをしてしまったのか問いただし、非難するだろう。そのことに対して弁解するつもりはない。俗物と罵ってくれて構わない。私は唯私一人の世俗な欲望に従って行動してしまった。これは紛れもない事実だ。諸君らの理想を粉碎して、私の本当に個人的な理由でこの選択をした。しかしながら、私は諸君らに私の行動の理由を教える義務がある。重ねて言うが、これから私が書くことは、諸君らに対する弁解ではない。諸君らへの謝罪であり、懺悔である。

私は幼少時代、とりえと呼べるものがなかった。人と較べて優れているようなところがなかった。寧ろ劣っていることが幾らかあった。両親、特に母にはよく叱られたものだった。学校の試験が悪かったら怒られた。遊びで散々に服を汚して、それがみつかって怒られた。そしてよく泣いた。喧嘩も苦手で、殴られたらすぐに泣いた。悪戯をして先生に怒られても泣いた。あだ名は当然「泣き虫」だった。

しかし、当時の私は、「泣き虫」に甘んじていた。別にそれが悪いことだとは思わなかったのだ。母の言うところによると、私は散々泣いてどこかへ行ってしまったあと、いつのまにか帰ってきてもうにこにこ笑っていたらしい。私は「泣き虫」ではあったが、立ち直りが早かったようだ。今では当時のことをそう覚えていないが、確かにそんな記憶はある。実際、私の幼馴染も、私が「泣き虫」だったことについて一つ覚えていることがある、とよく聞かせてくれ

た。

ある日、私が何人かの友人と隣町のどこかへ行ったときのことの話だ。私たちが道端で走り回っていると、その町の子供たちがやってきた。そして、ここは自分たちの遊び場であるからお前らはでていけ、と主張した。私の友人は、それに対して怒り、何事か言い返したのですぐに言い争いが始まった。すると、私はその場の険しい雰囲気能耐え切れずに泣き出してしまったらしい。それでその場の子供たちはなんだか馬鹿馬鹿しくなって、しまいには一緒に仲良く遊んでいたそうだ。

私の幼少期の回想に、浮かぶのは友と笑いあいながら遊んでいる風景だった。私には友達が多かった。それで「泣き虫」と罵られるのも平気だったし、泣いてもすぐに笑えた。幼き日の風景は笑い声に満ちていた。

「泣き虫」だった私も、中学校に上がってから少し変わった。人前で滅多に泣かなくなった。そして、年頃の男として相応の覇気などもあった。なにより、運動も勉強も人よりも少し優るぐらいに成長していた。

中学時代に熱中したのは、軍紀だった。幼少時代に喧嘩が苦手だったせいで抑えられていた闘争本能が、軍紀を捌け口として放出されているようだった。古今東西の、無論旧世紀のものも、ありとあらゆる軍紀を読んだ。

特に気に入ったのはパイロットの話だった。旧世紀の大戦で、一人で何百もの敵機を撃墜したエースパイロットの伝記などは何度も読み返した。殊更空の英雄に憧れたのは、私が、諸君らも大体そうであろうが、スペースコロニーという狭い人工の空間で暮らしていたからかもしれない。パイロットに憧れて空を見上げるたびに、地球の空に果てはないのに何故我々の暮らすこのコロニーの空には果てがあるのだろう、となんとも言えぬ寂しさを感じた。と同時に、果てない宇宙へ出てみたい、とも思った。

少年時代、宇宙には幾度か出たことがある。家族で他のコロニー

やサイドへ旅行などの用事で行くことがあった。私はそれが楽しみで仕方がなかった。無論、行く途中である。宇宙船に乗るのはとても楽しかった。自分で自由に操縦できるわけではなかったが、ともかくも宇宙にでているのである。窓から見える星の素晴らしさは、後に地球からみたそれを超越していた。地球から見える星空は、あくまで視覚的なものでしかない。しかし宇宙では、星の瞬きや鼓動を感じるができる。恒星を見ると、私の心まで燃え上がる。月は私を包み込む。この感覚は、今でも、激戦の最中でさえやってくることがある。

パイロットに憧れている私ではあったが、最初から士官学校へ行くなどとは考えていなかった。諸君かも知つてのとおり、士官学校はエリートが行くところだ。当時の私は人より勉強に長けていたとはいえ、飛びぬけて優秀なわけではなかった。それで、士官学校に行くのは最初から諦めていた。又、他の道で何かのパイロットになるにも国の学校に行かなければならなかったし、今のような人手不足ではないから、人材は選り好みされるので兵役でなれる望みも薄かった。だから当時は、士官になることは唯の憧れで、自分もつと普通の人生を送るものと思っていた。

ところが私は、幸運か、はたまた今の状況を考えてみると不幸か、士官学校に行くこととなった。

中学も残すところ一年と少しとなった秋のことだった。進路の話は度々していて、パイロットになりたいと言う憧れを先生や両親にも少し漏らしたこともあったが、普通に上の学校に進もうという風に合意していた。だというのに、私は先生に進路のことで話があると呼び出されたのだ。まだ最後の学年ではないから細かいことについてあまり話していなかったが、そのときはそれを決める段階ではなかったので、もう話し合うことはほとんどないはずだった。しかし、先生は親も連れて来いという。先生は私に話するとき、幾分か興奮した調子だったので、悪いことと呼び出されるのではないな、と直感していたが、それでも疑問に思った。だが、とりあえず、そ

の日の学校が終わった後、母を連れて先生のところに行った。

そのときのことはよく覚えている。私の人生が大きく変わった瞬間だったので、特によく覚えていたのかもしれない。私と母は学校に向かう途中で、車の中、揃って訝しげな顔つきで、何を話すのだろうかと言いつつ合っていた。

「お前、進路について先生と何か話したのかい。」

「特に何かを話した覚えはないなあ。この前決めたみたいに、上の学校に進学するのが僕の希望なんだ。思い当たることといえば、パイロットになる話ぐらいだけど、それは再三話して、無理だろうって結論を出したからね。まさかね」

「そうね。まあお前がパイロットになれるのだったら嬉しいけど、そんないい話はなさそうだな。でも、じゃあ何の話だろうか」

こうやって話しているうちに私たちは学校に着いた。

教室に入った時の先生の興奮のしようは、私に声をかけたときのそれより遥かに激しかった。早く言うべきことを伝えたい、という気持ちが顔から滲み出ているようで、動作もせかせかとしていた。

教室のドアを開けた私たちを見るなり、椅子から立ち上がって、早歩きでこちらに来了。そして、さあさあ早く早く、と半ば強引に私と母を椅子に座らせて、自分もすぐに座った。

「お母さん、そしてお前も、喜んでください。士官学校に入れるかもしれないんだ！」

まさかのことが当たった。私は嬉しいやらなにやら困惑して、一瞬事態が飲み込めなかった。体育の教師をしていて普段から少し粗暴だった先生は、今日はもう恥知らずと言ってもいいぐらいだった。しかし、先生とは長い付き合いで、それが祝福の現われであることを知っている私たちは、先生と一緒に浮かれた。そして思わず声が出た。

「本当ですか！」

「それはどうということなんですか？ 本当に士官学校なんて行けるんですか？」

母も必死になって聞いた。教室には三人しかいないにも関わらず、熱気が溢れていた。

「ええ」

先生は先ほどより少し落ち着いて返事をする、また息を整えて一気に話だした。

「どこからお話すべきか……ここ最近、ギレン総帥が軍備拡張を進めているでしょう。それで士官学校も人がいるようになったんです。それで、ええと……そうだ！ その人がいるっていうのが幸運なことにね、パイロットなんです。パイロットが必要だっていうんで、士官学校の定員を増やすって言うんです！」

私たちは声をあげた。パイロットになれる希望ができた。パイロットが欲しくて人を増やすのだから、当然自分が入れる確率も上がるだろう。しかし、ジオンは何故パイロットが必要なのだろう。軍備拡張とはいえ、主要な兵器は戦艦だ。戦闘機もあるが、あれは補助的な役割に過ぎない。そもそも、宇宙戦闘機のパイロットは戦艦の乗組み員から選ばれるものだ。それなのに「パイロット」が必要だという。疑問に思っていると、それを読み取ったのか先生がまた説明をはじめた。

「モビルスーツ、って聞いたことがありますか？」

そういえば聞いたことがあった。テレビで何度か耳にしたことがある。たしか宇宙空間での作業等に使うもだが、これまでの作業用の機械なんかと違って革新的な技術が導入されるらしい。なんでも手があるとか何とか。それが軍と関係あるのだろうか。そう思っていると、今度は母が答えた。

「ええ。なんでも革新的な技術を使うとか。それが何か関係しているんですか？」

「どうやらモビルスーツを軍事に利用するらしいんです。というか、最初から軍事で使う積もりだったという説もありますが……まあそれは置いておいて、とにかくモビルスーツのパイロットの育成を目的としているようです。お前が憧れてる戦闘機なんかのパイロット

とは違うけど……どうだろうか？」

「僕がパイロットになりたいのは、この自分一人で宇宙を自由に飛びたいからです。だからモビルスーツのパイロットにはなってみたいです。自分に可能性があるというのなら、とても嬉しいですよ」

本心から答えた。モビルスーツのパイロット、というのは是非ともなりたかった。私はそのことで頭が一杯になって、特に他の事は考えていなかったが、母は懸念している事が多くあるようで学力の事などを先生に聞いていた。それから問答が一段落つくと、先生が殊更真剣な眼差しを私たちに向け、少し興奮気味だったこれまでとはうって変わって、重い口調で話しだした。

「細かなことはどうにでもなるのですが、大切なのは士官学校に進むことを選ぶかどうかです。士官学校に進むということは、即ち戦争に与するという事です。昨今の宇宙情勢ですと、地球連邦との戦争も充分に起こる可能性があると言えます。士官は、死と隣り合わせの職業です。そのことをよく考えて、本当にこれに行くのかどうか、しっかりと話し合いをしてください。私は賛成も反対もしません。行くというのでしたら、できる限りの協力はします。もう一度言いますが、ご家族で話し合ってください」

確かにそれはそうだった。戦いに、殺し合いに行って死ぬこと。

それが当時の私には実感できていなかったし、それはそうたいしたことではないと思っていた。先生や私の親だってそう思っていたかもしれない。先生や私の親の世代は戦争に参加したことがなかった。「戦争」は「言葉」に過ぎなかった。そして、私たちは二人ともその「言葉」に同意を示し、会釈や挨拶などをして、その場を去った。

この先生との話し合いの後、言われたとおりに家族と話し合った。私は戦争に行くことは怖くなかったので、自分は士官学校に入りたいと主張した。戦争が怖くなかったのは、先述のように若い故に実感が湧かなかったというのもあったが、なにより、宇宙に出ないで一生を終えることが怖かったからだ。

母とは帰ったその日に話し合った。母は諸君らのように主義者で

はなかったが、一般的なジオン国民らしく完全な独立を希望していたので、独立戦争の空気が高まる中で軍隊に入ることは反対ではなかった。またそれには、母が小さい頃から行商の親に連れられて宇宙を転々としたので、強い人間にできていることも原因があったようだ。

父とは休みの日なんか顔を合わせるたびに断続的な話し合いが続いた。父はいつも特に意見を言わず、私の言うことに耳を傾けていた。私が、言うことがなくなったので黙ると、父は特に何も言わず、雑誌を読み始めたりして話を切った。しかし最終的には父も承諾してくれ、私は士官学校に進むことに決まった。

それからは何事も順調に進んだ。学力も順調に伸び、本番の試験は余裕を持って合格できた。先生も、これならば定員が増えていくともいけたかも知れない、と言うほどだった。もちろん身体検査も、運動が多少得意な私には何等問題はなかった。

こうして、私の士官学校生活が始まるのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7833p/>

賢者諸君へ

2011年1月15日17時43分発行